

## 論文

# 日本語教育へのインセンティブ —「働く女性」ロールモデルの重要性—

平畑 奈美

### 1 はじめに

近年、日本語教師養成のあり方を見直そうという議論が各所で進み、これに関する公文書も次々と発表されている。新しいところでは、2018年7月24日付で首相官邸HP等に公開された「外国人材の受入れ・共生のための総合的対策案」<sup>1</sup>のP2に、「日本語教師の質の向上を通じ日本語教育水準を高めるべく、日本語教師養成・研修機関が実施すべきプログラムを開発し、その普及を促すとともに、日本語教師のスキルを証明するための資格創設について検討する」との文言が記された。

また、同資料P9には、「海外における日本語教育の充実」という項目が立ち、「外国人材が日本語を学べる場を増やすことを目的として、日本語教師の給与助成など各国の教育機関の活動に対する支援を拡充するとともに、日本語教師の質を上げるため日本語ネイティブ教師を養成し教育機関に派遣する」と記されている。

国内外の日本語教育の充実、日本語教師養成の必要性自体は、いわゆる「留学生10万人計画」<sup>2</sup>が発表され、制度としての日本語教師養成が始まった1980年代から、公文書に繰り返し記載されてきた文言であり目新しいものではない。ただ、過去最高を毎年更新しつづける日本国内の外国人材、強まるばかりの外国人労働者への依存、日本語力の十分ではない児童生徒の学校教育現場での増加、などを踏まえて、日本語教育の重要性がこれまでにないほど高まっているのは確かである。

その一方で、日本語教師の供給は追いついておらず、「日本語教師不足」が進んでいる（平畑2018）。「日本語教師のスキルを証明するための資格創

設」は、おそらくはこの状況を打開するための切り札として提案されたものであろう。確かに、日本語教師養成制度の改善や資格化は、育成する日本語教師の質を高める上である程度有効に作用するだろう。しかし、日本語教師になることを決めた人をよりよく教育する方策を考えるためだけでなく、日本語教師になりたいと思う、よりよい人を増やすための方策も必要ではないだろうか。特に海外での日本語教育の振興を考えるのであれば、やはり渡航に対する自由度の大きい若年層の日本語教師が必要である。

こうした問題意識に立ち、本稿では、若年層の日本語教育へのインセンティブを高める上で、何が必要なかを論じていくこととする。

## 2 現状

### 2.1 「日本語教師の資格」をめぐるこれまでの展開

「日本語教師」という国家資格は存在しないが、1988年に設定された文部省（当時）のガイドラインに基づき、(財)日本語教育振興協会が定めた「日本語教員の資格取得の基準」がそれに準じる機能を果たしてきた。その基準とは、(1) 大学での日本語教育科目の主（副）専攻、(2) (財)日本国際教育支援協会の日本語教育能力検定試験の合格、(3) 日本語教師養成講座での420時間以上の教育、の三点のうち、いずれかを満たすこととされる。このうち(2)の日本語教育能力検定試験は改訂を経てきたが、上記3点の概要自体に変化はない。

1988年にこのガイドラインが定められた時、なぜ日本語教師が国家資格化されなかったかについて、大沢（2008）は「日本語教育関係者が主張する『包括的養成の必要性』」（同：73）に対して、「留学生10万人計画」の達成を優先する側からの「日本語教員の緊急かつ大量養成の必要性」（同：66）の主張が強かったためだと説明している。つまり、時間をかけて、学校教員養成に準じる「高度で責任ある教員養成」を行いたい学術的日本語教育界の要請と、日本語教育担当者の数を至急確保したい「社会的要請か

つ国家戦略的要請」との相克があり、文部省ガイドラインはその妥協の産物として生まれたということである。しかも、その文部省ガイドラインも、大沢によれば、「従来の民間での養成にも最大限配慮」（同：77）して、すなわち、既にあった日本語教師養成機関と、既に活動していた日本語教師に配慮して、強制力を持たないものとなった。国、学术界、現場という三者の思惑が交錯し、現状の、半ば公的と言えなくもないが決して国家資格ではない日本語教師の「基準」というものが定まり、30年にわたってそれが維持されてきたのだということである。

日本で最初の日本語教育専攻課程<sup>3</sup>が置かれた筑波大学で日本語教師養成に携わった草薙（1987：59）は、留学生10万人計画が立案されたにもかかわらず、日本語教師養成制度が学校教員養成のように整備されなかったことについて、「国が現在のように方向を全く打ち出さず、日本語教師養成が羊頭狗肉になるとすれば（中略）、優秀な人材を集めることが全く不可能になるのではないだろうか」と憂えた。

## 2.2 日本語教育界の高齢化

草薙の懸念はそれから30年を経た現在も、大学での日本語教師養成を行う人間にとって切実な問題である。日本語教師の数自体は、この間増え続けてきたが、増加しているのは主としてボランティア教師である。現在国内の日本語教師の約6割をボランティアが、少なくとも半数を50歳以上が占める<sup>4</sup>。また日本語教育界への新規参入層の高齢化も深刻である。

日本語教育能力検定試験を実施するJEES（日本国際教育支援協会）は、平成15年以降の日本語教育能力検定試験受験者の年代別比<sup>5</sup>を公開している。平成15年時点は、受験者全体の過半数、3,293人が20代だったが、平成29年には20代受験者は2,012人、全体の23%となっている。一方、平成15年時点で843人、全体の13%だった50代以上の受験者は、平成29年には2,126人で、全体の37%を占めている。いかに日本の人口ピラミッドが変

化しようと、15年でこれほどは変わっていない。明らかに、若者の間で、日本語教師という仕事に対する関心が低下しているのである。

### 3 問題の所在

日本語教師のうちボランティアが6割、50代以上が過半数という状況が、日本語教師の質の低下に直結すると断言はできないが、やはりこれは正常な状態とは言いがたい。業界に長く留まり、キャリアを積み重ねて行く若手の参入がなければ、日本語教育界は活性化もしない。

日本語教師の問題として、賃金の低さが取り上げられることがある<sup>6</sup>。そうした言説の存在自体が問題視もされる(丸山2015)。ただ、平畑(2018)は、教育の英語化政策による巷の「英語志向」の強まりや、日本語教師の仕事の価値に対する社会の認識の低さも問題ではないかと指摘している。若者たちが、日本語は英語ほど価値のある言語ではないと考え、日本語教育の意義についても、日本語教師の仕事の魅力についてもそもそも注意を払わなければ、日本語教師の処遇の低さが問題視されることさえないだろう。仮にそうであれば、資格を創設しただけでは、若者の意識を変えることは難しいだろう。小関・田中(2015:102)は、若者のグローバルキャリアへの誘導のためには、ロールモデル確立が課題であると述べている。日本語教育の分野で、若者たちが好ましいと思う形で活躍している人物を、ロールモデルとして提示し、日本語教育への認知を広げていく必要があるのではないだろうか。

### 4 調査

こうした問題について確認するため、若年層の集団である大学生に注目し、意識調査を行った。調査対象は、報告者が東洋大学文学部で2017年度と2018年度に担当した科目、「国際文化理解A」を履修した文学部の日本人学生<sup>7</sup>である。東洋大学は日本の中心都市に位置する、いわゆる中堅大

学であり、その点では日本の典型的な若者像というものを比較的反映しているかもしれない。ただ、スーパーグローバル大学の文学部に所属し、国際文化という名のつく科目を履修している時点で、当然ある種の偏りを持っていることは想定される。しかし、日本語教育との親和性の高い文学部で、国際的なテーマに関心を持つ学生が、日本語教育にどのような意識を持っているのかを知ることこそ意義があるとも考えられる。日本語教育界への参入を促進することが、現実的に可能な若者たちだからである。

調査は2017年度と2018年度の二回にわたり実施した<sup>8</sup>。

まず、2017年7月と、2018年7月に、海外での生活希望の有無や、その目的、また海外での日本語教育に関してどう思うかについて、アンケート調査を実施し、2017年には102名の学生（女子82名、男子20名）、2018年には、114名の学生（女子79名、男子35名）からの回答を得た。二回の調査の対象者に重複はない。

さらに2018年7月に、この科目の受講生に、現役日本語教師による90分間の講演会の聴講を求めた。講演者は30代前半の女性で、東洋大学の卒業生である。大学では英語学習に邁進していたが、アメリカとオーストラリアでの留学中、日本や日本語についての説明をたびたび求められる経験をしたことから、日本語教育に転向した。卒業後は国内の日本語学校で、非常勤講師を経て専任講師となり、出産休暇、育児休暇期間を経て、現在、東南アジアからのEPA研修生（介護福祉士候補生）に対する日本語教育に携わっている。この講師のキャリア形成に関する講演を聞いた前後で意識がどう変化したかについても、アンケート調査および自由記述形式での調査を実施し、110名の学生から回答を得た。

## 5 結果

### 5.1 長期的な海外生活についての希望とその目的

回答者が国際交流科目を受講する大学生であることから予測されると

おり、やはり海外生活への希望は強く、2年連続で2割程度の学生が、「非常にある」「ややある」と回答している（図1）。

次に、海外で生活したい理由を、図2に示した選択肢から複数選択形式で尋ねた。続いて第一の理由を単一回答式で尋ねた（図3）。また実際に行きたいと思う地域も尋ねた（図4）。

やはり英語志向は顕著である。複数回答形式では2017年度、2018年度とも約8割の学生が選択した。単一回答でも、他のどの選択肢よりも学生に多く選ばれている。注意したい点は、「就職に有利になりそう」という選択肢よりも、「英語力向上」は重視されているというところである。つまり英語力は、単に就職に有利になる以上の、様々なメリットをもたらす万能のカードであると考えられているということである。行きたい地域としても、英語圏が圧倒的に支持されている。一方、日本語教育志向の基盤になると思われる「日本の文化や生活、日本語などを海外の人に紹介したい」は、複数回答式でも選ばれることは少なく、2割から3割程度であり、単一回答では、数名にとどまる。

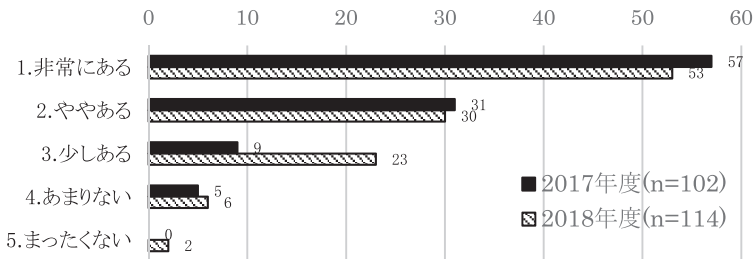


図1 勉強や仕事等で、海外で長期的に生活したい気持ちがある（単一回答）

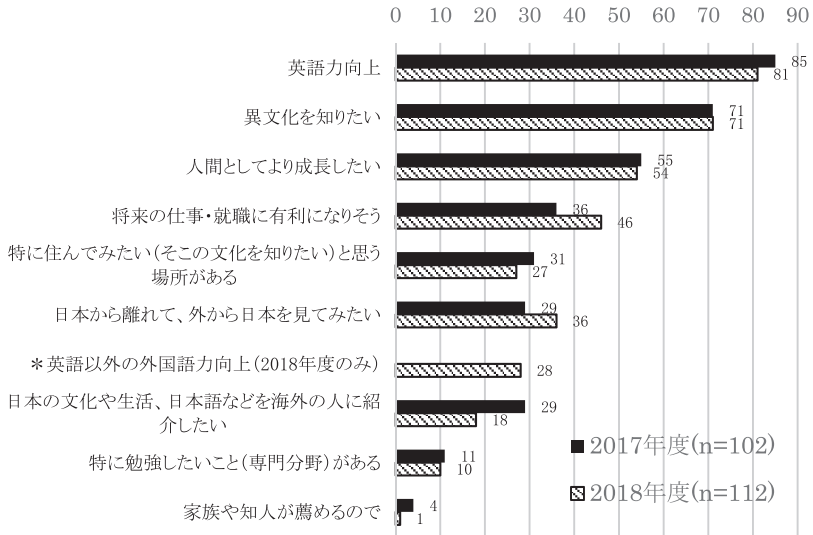


図2 海外で生活したい理由(複数回答)

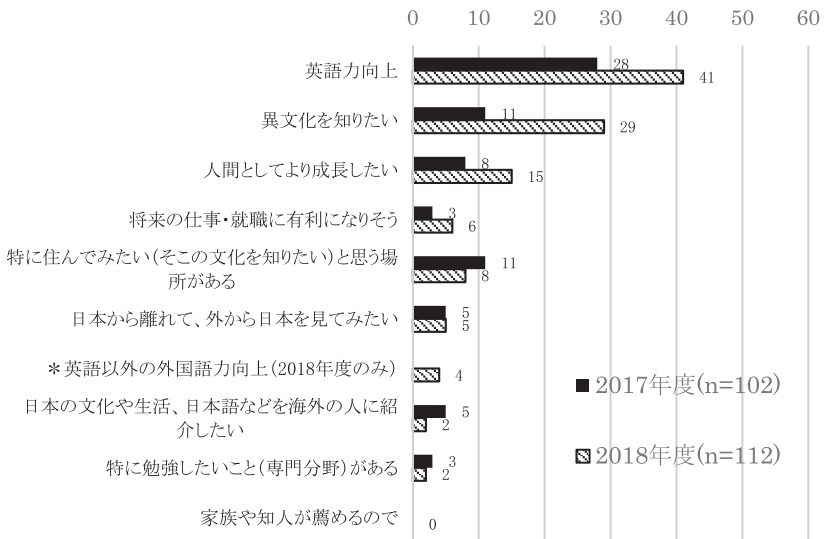


図3 海外で生活したい理由の第1位(単一回答)

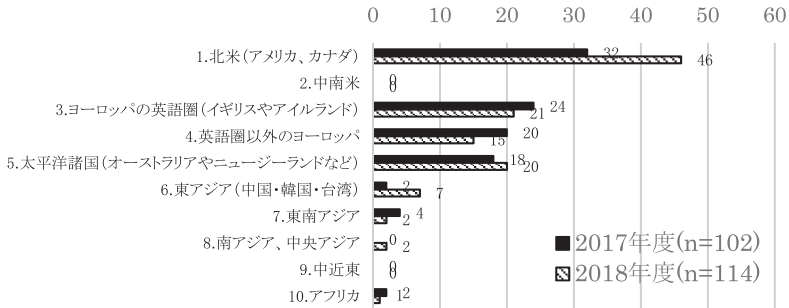


図4 海外で生活するとしたら行きたいところ (単一回答)

## 5.2 海外での日本語教育活動についての意識

海外に行きたいと考える学生たちは、海外での日本語教育にも興味があるのだろうか。事前に説明した、海外で日本語を教える人を派遣する公的プログラムについて、参加してみたいかを尋ねた(図5)。平均で56%の学生が、「参加してみたい」あるいは「やや参加してみたい」と回答しており、プログラムへの希望自体はあるということがわかる。また、海外での日本語教育について、半数程度の学生が、「おもしろそう、楽しそう」、「将来なにか役に立ちそう」などと肯定的な評価を示している。その一方で、「たいへんそう、自分にはできなさそう」という評価も、4割近くに上る(図7)。

なお、2017年度のみ、実際に海外に日本語を教えに行くとしたらどこに行きたいかという質問を行った。図4と同じく、英語圏が支持されており、学生たちは日本語を教えに行く場合であっても、自分の英語力向上に役立つ場所を志向するという結果を示している(図5)。ただし、アジアを選択する学生も増えることから、日本語教育がアジア圏で盛んだという知識は、少なくとも一部は持っていると思われる。なお、アフリカを選択した学生も多いが、「アフリカは日本を知らない人が多いと思ったから」といった、やや直感的な理由が自由記述欄に付されていた。



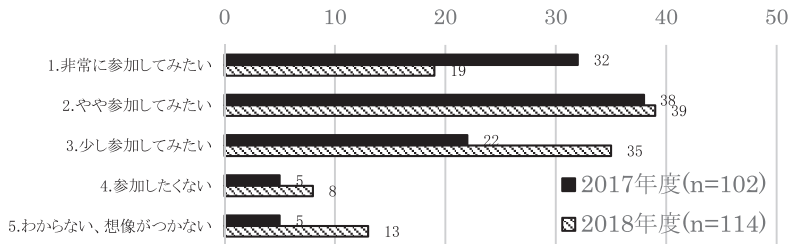


図5 海外で日本語を教える人を派遣する、日本の公的派遣プログラム（日本語パートナーズや青年海外協力隊など）に参加してみたいか（単一回答）

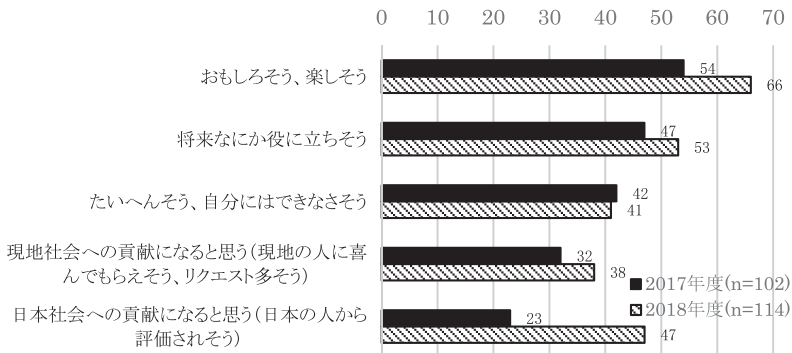


図6 海外で日本語を教えるということに関するイメージ（複数回答）

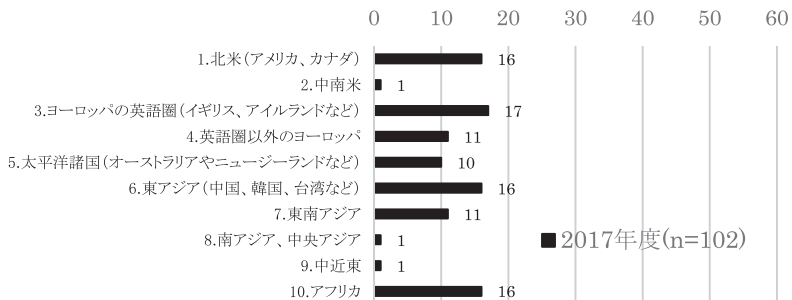


図7 海外で日本語を教えるとした場合、行きたいところ（単一回答）

### 5.3 現役日本語教師の仕事についての講演を聞いて生じた変化

現役日本語教師を招聘しての講演会は、2018年度のみ実施した。講演会終了後に、まず日本語教師という仕事を以前から知っていたかどうかを尋ねた（図8）。続いて、この講演会を聞いて、日本語教師という仕事についての印象がどう変わったかを尋ねた（図9）。仕事のおもしろさ、社会への貢献度等について、好感度が大きく上がり、やってみたいという気持ちも強まったことがわかる。

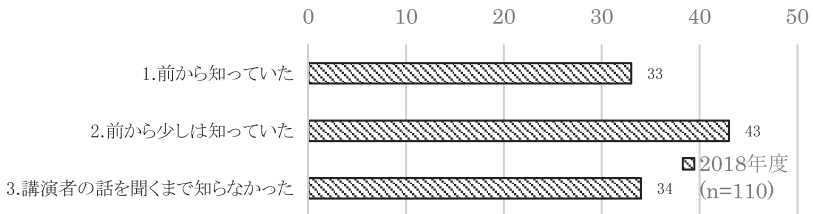


図8 日本語教師という仕事について知っていたか

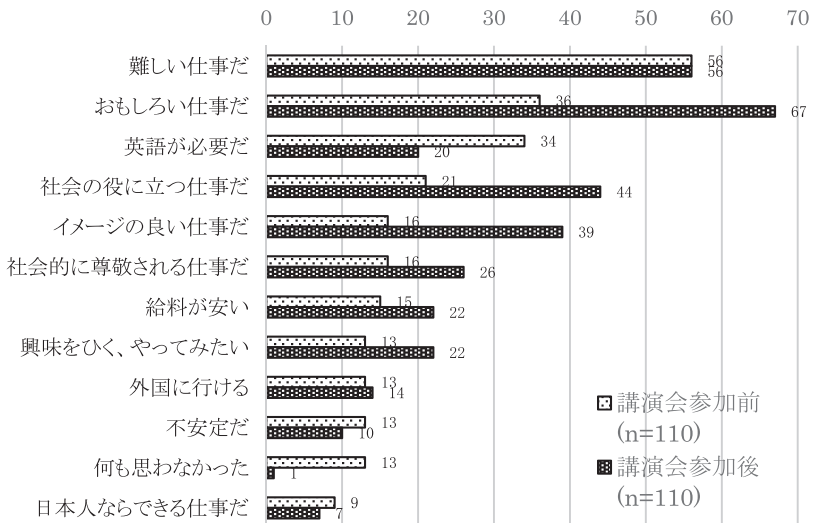


図9 日本語教師という仕事についてのイメージ（複数回答） 講演会前後の比較

具体的に学生たちは、現役日本語教師の話のどのような部分に強い印象を受けたのか。110名の提出した自由記述を分析したところ、その内容は主に表1の3カテゴリと8つのサブカテゴリに集約されることがわかった。各カテゴリの代表的な記述を表2にまとめる（記述中の「H」は講演者を示す。文は原文のまま記載）。

表1 自由記述から抽出されたカテゴリ

|                        |  |
|------------------------|--|
| 日本語教師・日本語教育についての関心の深まり |  |
| (1)                    | 日本語教師についての発見：日本語教師について何も知らなかった、あるいは誤解していた。日本語教育は直接法で行われること、外国の外国人だけが対象ではないことなど知らなかった、等 |
| (2)                    | 日本語教師の専門性への気づきと敬意：日本語教師は日本人なら誰でもできるわけではない、たいへんな仕事だとわかった、等。                             |
| (3)                    | 職業としての日本語教師への関心の芽生え：日本語教師はやりがいのある仕事だと感じた、将来の選択肢に加えた、等。                                 |
| 世界観の広がり、日本への関心の深まり     |  |
| (4)                    | 発想の転換：英語だけが世界とつながる手段だと思っていたが、日本語でもつながれることを知った、等  |
| (5)                    | 日本を知ることへの意欲：自分が日本のことを何も知らないことを意識した。日本文化についてもっと知りたいと思った、等。                              |
| 学ぶこと、誇りを持って働くことへの意欲    |  |
| (6)                    | 仕事への情熱に対する感動：講演者の生き方に憧れを覚えた、輝いて見えた、自分も大好きな仕事をしたいと思った、等。                                |
| (7)                    | 女性のキャリア形成手段としての魅力：育休・産休もとれる職場に魅力を感じた、等   |
| (8)                    | 勉強そのものの重要性についての気づき：好きな仕事に就くため、誇りを持って生きていくために努力したいと思った、等                                |

表2 自由記述の抜粋

| 日本語教師・日本語教育についての関心の深まり  |
|---|
| (1) 日本語教師についての発見  |
| <p>今まで日本語教師という仕事は聞いたことがありましたが、何をするのかは知りませんでした。(略)日本語教師は大変なことがたくさんあることは話を聞いてわかりました。しかし、学習者の日本語の上達を間近で感じたり、刺激のある環境にあるなどという面でとてもやりがいのある仕事だと感じました。世界中で働くことができる可能性があるという点では海外が好きな私にとってとても興味がある仕事だと思いました。</p>   |
| <p>今まで『日本語教師』という仕事に特に興味がなく、「日本語で日本語を教えるんだから、英語が好きな人にとってはあまり関係ないのかな」とさえ思っていた。しかし今回考え方が少し変わった。</p>  |
| <p>H先輩が母親でありつつ、仕事に取り組むことができている背景には、日本語教師のやりがいと、働きやすさがあると仰っていました。私が講演から読み取った日本語教師のやりがいは、可能性の広さです。それは、世界中で活躍できる可能性があるということ、日本の良さをも再認識できること、学習者の上達を感じることができること等、多方面に広がる可能性をもつ点がこの職業のやりがいではないかと考えました。最も魅力的に感じた点は異文化に触れる刺激的な環境に自分の身を置けるということです。仕事場でも新たな発見から視野を広げ、自分の成長に繋がられるのは素敵だと思いました。</p> |
| <p>日本語を母語としない方に日本語で授業を行うということに大変驚いた。今回のような機会が無ければ知ることができなかつたかもしれないし、日本語教師という職業を詳しく知る人はそう多くないと思う。そこから日本語教師の認知度の低さの現状に気付かされた。</p>   |

**(2) 日本語教師の専門性への気づきと敬意**

日本語を教えるには英語やその国の母国語を話せることが前提であると思っていた。しかし日本語を教えるにあたって日本語以外の言語を使わず、すべて日本語で授業を行うことに驚いた。(略)日本語は活用や、様々な言い回しがあるため、日本人の私でさえも難しい。そんな中で教えているのはとても素晴らしいと思った。海外での日本語教師に対してあまりいいイメージを持っていなかったが、講義を聞いて興味を持ちもっと知りたいと思った。

お話を伺って驚いたことがあります。それは、日本語がしゃべれているのだから外国の人に日本語を教えることなんて簡単だと思っていたことが間違っていたことです。

私は日本語教師について無知だった。だから学ぶことがたくさんあった。日本語教師はただ日本語を教えるだけかと思っていたが、文化やマナーも教えるということを知った。生徒さんにとってはとてもいいと思った。

日本語教師という職にあまり関心はなかったし、どういった仕事内容なのかについても知らないことが多かったが、今回、とても貴重な経験だったと感じた。日本語を母語とする人たちが教えるのだから、特に難しいことはないのではないかと考えていたが、看護師や介護士に必要な難しい専門用語や、その難しい用語をどのようにわかりやすく伝えるかを工夫するなど、様々な角度からアプローチが必要な難しい仕事だった。そのような難しい職をこなしつつも家庭での育児との両立ができていてH先輩はすごくいきいきして見え、自分の仕事に誇りを持っていて格好いいと感じた。この忙しさを支えているのは紛れもなく、「日本語教師に対するやりがい」だと思う。日本語教師は、言語を教えるだけにとどまらず、日本の良さについて世界に発信していく力をもった魅力的な職業であることが分かった。教師という職は自分には縁のないものだと考えていたが、選択肢が広がるきっかけとなった。

### (3) 職業としての日本語教師への関心の芽生え

正直、お話を聞くまでは日本語教師という職業がどのようなものなのかもよく知らなかったし、興味・関心もありませんでした。しかし、H先生のお話を伺って、自分の将来を考えるうえで、日本語教師という選択肢もありだなと思うようになりました。日本語教師はとてもやりがいのある仕事だと分かったからです(略)人それぞれ色々な事情があって日本に来て必死に日本語を勉強していると思うと、その手助けが少しでもできたらいいなと思いました。

私は将来、外国人の方と接することのある環境の職業に就きたいと考えている。この講演を聴くまでは、空港や観光業、ホテル業などの職場しか思いつかなかったが、日本語教師という職業を知ることができた。Hさんは毎日異文化に接していると仰っていた。このことにとっても興味が湧いたし、将来を考える道が一つ増えた

私は語学とコミュニケーションについて学びたいと思って入学し、現在それについて勉強していますが、今後それを活かせる職業については考えていませんでした。(略)今回、Hさんのお話を伺って、もっとこの職業について知りたいと思いました。日本語教師という職業だからこそ日本の良さを改めて知ることができるというのは素敵なことだと思いました。

自身の将来の選択肢が広がったと思いました。私は元々中学校の英語教師を目指していたのですが、他言語に関わる仕事というのは日本語教師を含め、自分がきづいていないだけで、多くあるのだとわかりました。

|                    |
|--------------------|
| 世界観の広がり、日本への関心の深まり |
|--------------------|

|           |
|-----------|
| (4) 発想の転換 |
|-----------|

|  |
|--|
| <p>異国の人達に勉強を教えることは世界との繋がりを実感できる素晴らしいお仕事だと思います。私が英米文学科に所属するのも世界中の人々との繋がりを持つ為に、まずは言語を知ろうと思ったからです。H先輩のように世界に繋がれる人になる為に、今私に必要なのは本当に英語だけなのか懸念しているところです。</p> |
|--|

|   |
|---|
| <p>今回の講演を聴いて、私はまだ日本のことを全然理解できていないんだなと改めて思い知りました。私はまだ海外に一度も行ったことがなく、異国の文化に触れることがほとんどないです。日本にいる外国人を見るくらいです。それくらいの経験しかしていないのに、グローバル化などという流行の言葉に乗っかっていて、海外にばかり目を向けていた自分を改めなくてはと思いました。</p> |
|---|

|   |
|---|
| <p>日本人は自国よりも欧米の国の文化に憧れているような気がよく、します。また、欧米に対しコンプレックスのようなものを抱いてさえいるような気がします。実際私も、日本よりも海外に住みたいとか、大してその国の文化も知らないのに憧れを抱いていました。しかし、最近になって自国である日本について知らないのに、他国ばかりに興味を持ち憧れを抱くことに何か違和感を覚えました。本当に日本人は日本のことを知らなすぎるのだなと話を聞いていて、思いました。日本人として当たり前な日本のことをもっと勉強しようと思うことができました。Hさんは、日本について説明できるようになりたいという思いから今の職業に出会えて素敵だと感じます。</p> |
|---|

### (5) 日本を知ることへの意欲

今までは、日本語を教えることには興味がなく、自分自身が日本語があまり好きではありませんが、Hさんのお話を聞いてから、意識が変わりました。留学されたお話と、日本について何も話すことができなかったというお話を聞いて、Hさんが体験されたこと、特に、日本の知識が足りなかったという点は、自分にも当てはまることに気づき、日本や日本語について知ろうと思うようになりました。

私は英語の教師を目指している。その理由は、英語が好きであり子どもが好きだからである。それは彼女も同じであったが、彼女は途中で「外国語を教えるためにはまずは日本のことについて知らないといけない」と思った。そこに私ははっと気づかされた。ただ大学で英語を勉強して教育の方法について学んだだけでも確かに先生としてやっていけるかもしれないが、日本のことあるいは日本語について知っているのと知らないのでは、教える質に違いが出てくると思う。

お話を聞いて思い出しましたが、留学生に擬態語や擬音語について聞かれた時に、普段自分たちが使っている言葉なのにうまく説明できませんでした。自分の中では理解しているつもりだったのですが、説明できない自分が恥ずかしくもどかしい気持ちでした。海外にでたらこのようなことが毎日のようにあるのだと思うともっと自分の言語や文化、政治状況などについて勉強しなくてはならないと強く思うようになりました。

### 学ぶこと、誇りを持って働くことへの意欲

### (6) 仕事への情熱に対する感動・誇りの持てる仕事への憧れ

先生は今の仕事が天職とおっしゃっていました。私も胸を張ってそう言える職業に着きたいと思いました。講義をしてくださったH先生はとても自信に満ち溢れていて、きらきらしているように見えました



特に先輩の話を聞いてよかったと感じる点は、自分も頑張ろうと思えたことです。今私たちの周りには大人を見ていると大人になるとつまらなそうだなと感じることが多くあり、自分の将来に不安を感じてしまいます。しかし先輩は自分の職業を天職だと楽しそうに話していて、自分も先輩のように輝いている大人になりたいと思いました。

Hさんは、給料の高さや社会的地位にとらわれずに、達成感と仕事をする楽しさを重要視しながら教師として働いているが、私もHさんのように、将来自信と誇りを持てるような職業につけるように、大学にいる間多くのことを学び、そして様々な経験を積み、将来の自分に繋げていきたいと思う。

私はなんとなく就職するのではなく、Hさんのように自分にあった職業を見つけたいと思うようになりました。決して給料は高くはないけれど自分に合っていると言える職で働けていることは素晴らしいと感じました。

#### (7) 女性のキャリア形成手段としての魅力

H先輩は、お子さんもいながら仕事をこなしていかっこいいなと思うし、とても憧れる。その生活が維持できているのは会社の待遇がいいということが関係していると思う。産休制度や有休制度が充実している会社は家庭を持つ女性にとって最大の利点だということを知れたし、職業を選ぶうえでそういったところを確認することも大事だということを知れた。

H先輩は、共働きが当たり前となってきている現代において、産休・育休を利用することができる職場なのかどうかは重要なことだとおっしゃっていた。私もこれはとても大事なことだと思うし、同じ女性として休暇後も仕事復帰して第一線で活躍する姿に憧れた。

女性が働く環境で気になるのが育休・産休に理解がある職場かどうか、という点です。H先輩から、先輩の学校はその理解がある職場だと聞いてますます就職意欲が高まりました。

### (8) 勉学そのものの重要性についての気づき

この話を聞くまであまり留学にも興味を持っていませんでした。言語の壁にぶつからない日本で生活できればそれでいい、と思っていたので、日本語教師になるとしても、国内の就職を考えていました。しかし、話を聞いて留学への意欲がわいてきました。母国語ではない環境の中で第二言語を学ぶという国内日本語学習者の気持ちを理解することに繋がる、日本のことを全然知らなかった自分に気づかされるなど、国内で働く日本語教師になったときにも役立つ力になること、日本の中でだけ生活しては気づかない自分の欠点などを知ることができることを知って自分も留学を経験して大きく成長したいと思いました。

私も将来、誇りを持ち、やりがいを感じることができるような仕事に就きたいと思い、より一層、語学や海外の文化について学ぶモチベーションが上がりました。

H先輩がお話の最後のほうに「日本語教師という仕事は天職だと思う」とおっしゃっていた。わたしはそれはH先輩が大学で自分の興味のあることを必死に勉強したうえで選んだ職業であるからなのだと強く感じ、その大切さを改めて痛感した。(略) 本当に必死でやっていると思わぬ道が開けてくることがあるが、本当に真剣にやらなければ見えてこない。英語は毎日さぼらず勉強しようと思った。

## 6 まとめと考察

今回のアンケート調査で、学生たちは、英語力の向上を重視しており、海外の中では英語圏に関心を持っているということ、日本語教育というものについては、あまり知識がなく関心もない、という状態であるということがわかった。その一方、彼らにとって身近な人物が語る日本語教育の魅力、日本語教師のやりがいについては、強い反応を示した。特に女子学生は、多文化に接することができ、産休・育休を経てなお常勤教師として働

き続けられる仕事であるということに注目していた。

現役日本語教師は講演の中で、日本語教師という仕事は国家資格ではないこと、国内日本語学校の専任講師であっても、待遇があまりよくないということも言及した。しかしそれよりも学生たちが目を向けたのは、比較的年齢の近い彼らの先輩が、日本語教師は天職だと言い、育児をしながら誇りを持って働く姿を見せたことである。日本語教師という仕事の社会的意義とやりがい聞き、産休・育休制度がとれる勤め先があるということも知り、さらに日本人である自分と日本との関係と振り返って、学生たちは日本語教育に興味を示し、将来に向けた学びを考えるようになった。日本語教師は一般に8割程度が女性であると言われる。仕事と家庭を両立させ、働くことに喜びを感じる女性日本語教師のロールモデルは、もちろんそれがすべてではないとしても、日本語教師へのインセンティブとして機能する可能性が高いのみならず、英語を中心として世界を見ていた学生たちの視野を広げ、日本人としての自覚を促し、総合的な学習意欲向上にまで好ましい影響をもたらすということが、自由記述の結果から示唆される。

対して、日本語教師の資格が公的なものであるかないかは、若者たちの日本語教師への志向に、それほど強い変化を与えない可能性がある。図書館司書や学芸員など、大学で若者が取得できる公的な資格科目はほかにもある。日本語教師の資格を公的なものとし、その養成制度を整備したとしても、そもそも、その資格を得て行う日本語教師という仕事が、他の有資格の仕事と比べてより魅力的でなければ、若者が積極的にこの業界を志すようになることはないだろう。

## 7 提言

今政権が検討しているという「日本語教師のスキルを証明するための資格」とは、どのようなものであり、誰に与えられるのかについては、まだ

具体的な内容が明らかになっていない。それは誰を利する資格となるのだろうか。新しい「日本語教師の資格」は、国家の事情と業界の既得権に配慮し、大学の専攻学生を守ることのなかった30年前のガイドラインの轍を踏むものとなりはしないだろうか。

日本語教師とよばれる人々は、その働く環境も、教える相手も、極度に多様である。一方、日本語教師の資格創設を謳った、先の「外国人材の受入れ・共生のための総合的対策案」は、「中小企業等の人手不足の深刻化を踏まえ」、日本で就労する「外国人材の受け入れの促進に向けた取組」が必要であるとの文言を巻頭に掲げ、そのための日本語教師養成の必要性に言及するものである。日本で就労する人々と一口に言ってもその実態も多様ではあるが、現在の状況を見るに、中小企業等で働く外国人材には、大学や日本語学校で日本語の長期集中コースを受ける人は多くはなく、その日本語教育はボランティアに任されていることも少なくはない。既に述べた通り、ボランティアであるから優秀でないなどと判断できる根拠はどこにもない。問題は、ボランティアというものが、日本の労働市場の文脈では「自発的意思によって働く人」ではなく、「無給で働く人」として計上されていることである。たとえ日本語教師の資格が創設されたとしても、その社会的ステータスが高いものではなく、資格を取っても無給労働のポストしか得られないのであれば、1987年に草薙の憂えた通り、前途ある「優秀な人材を集めることが全く不可能になる」恐れがある。若年時からキャリアを積み上げ、業界に長くとどまり、社会的に尊敬され、一定の報酬を得て安定した生計を営んでいる人材を育ててはじめて、日本語教師養成は、「教師養成」として、日本社会に認知されるのである。

そこで、日本語教師の資格化という議論に、あえて教育実践エリート養成という視点を付加することを提案したい。創設する「日本語教師の資格」は段階化し、その頂点には、例えばフランスの高等教育資格アグレガシオン (Agrégation) のように、少数ではあっても、一定の待遇と生活の安定

が公的に保証されるクラスを設定すべきである。難関を突破したことが社会的に認められた日本語教師は、日本語教育界を目指す若者のインセンティブとなるのみならず、日本がこれから諸外国の労働者と向き合うにあたり、政策的に「日本語」をどのように位置付けているのかを可視化するものともなるだろう。

### 参考文献

- 大沢えり (2008) 「『留学生受け入れ10万人計画』と日本語教員養成」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』 31、66-91
- 小關悠里・田中研之輔 (2015) 「グローバルキャリア形成の道標 (1) —元在外公館派遣員のライフヒストリーから—」法政大学キャリアデザイン学会『生涯学習とキャリアデザイン』 167、85-104
- 草薙裕 (1987) 「日本語・日本文化学類—筑波大学における日本語教師の養成」『日本語教育』 63、52-59
- 平畑奈美 (2018) 「『日本語教師不足』問題に関する考察—若年日本語教師供給増に向けた課題—」『東洋大学文学部国際文化コミュニケーション学科紀要』 1、139-158
- 丸岡敬介 (2015) 「『日本語教師は食べていけない』言説 その起こりと定着」『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』 15、26-61

注 URLはいずれも2018年10月1日参照

---

<sup>1</sup> 首相官邸 <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/gaikokujinzai/kaigi/dai1/siryous3.pdf>  
法務省HP <http://www.moj.go.jp/content/001269918.pdf>

<sup>2</sup> 留学生数10万人は、目標の2000年から3年遅れて達成された。しかし、10万人の留学生を預かるために国が必要であるとした10,600人の日本語教員の確保については、これが常勤職を想定しているのであればまったく達成されなかった。なお、JASSOの調査で、2017年(平成29年)5月現在の日本国内の留学生数は267,042人となっている。一方、同年11月の文化庁調査では、国内の日本語教

師数は39,588人だが、そのうち常勤は5,115人（12.9%）に留まり、非常勤11,833人（29.9%）、ボランティアが22640人（57.2%）である。

独立行政法人日本学生支援機構（JASSO） [https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_e/2017/index.html](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2017/index.html)

文化庁文化庁国語課 [http://www.bunka.go.jp/tokei\\_hakusho\\_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku\\_jittai/h29/pdf/r1396874\\_01.pdf](http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_jittai/h29/pdf/r1396874_01.pdf)

<sup>3</sup> 1985年に筑波大学と東京外国語大学に設置された。

<sup>4</sup> 注2 参照

<sup>5</sup> 日本国際教育支援協会

[http://www.jees.or.jp/jltct/pdf/graphs/2017\\_jltct\\_3\\_nendaibetsu.pdf](http://www.jees.or.jp/jltct/pdf/graphs/2017_jltct_3_nendaibetsu.pdf)

<sup>6</sup> 例として、サンデー毎日2016年6月12日号に「低賃金実態に待遇改善も必須 国際化の最前線「日本語教員」」という記事が、毎日新聞2018年11月19日社説に「日本語教師は総じて給料が安く離職率が高い。全体として不足していると言われている」という一文が掲載されている。

<sup>7</sup> 留学生に分類される学生は含んでいない。毎日新聞2018年11月19日社説 就労外国人 日本語教育 政府の態勢は心もとない日本語教師は総じて給料が安く離職率が高い。全体として不足していると言われている。

<sup>8</sup> 調査は授業内課題活動の一種として実施した。この結果については研究のため使用する場合があるということ、データは匿名で扱うということ、データ使用に賛同しかねるということであれば使用しないということは、学生に伝え許可を得た上で用いている。得られたデータは、本報告で用いたほか、授業改善のためにも使用している。